

Nara National Museum

奈良国立博物館

だより

第45号

平成15年 4・5・6月



国宝 華嚴宗祖師絵伝(義湘絵) 高山寺

平常展

佛教美術の名品
4月1日(火)～
本館

特別展

女性と仏教
いのりとほほえみ
4月15日(火)～5月25日(日)
東・西新館

女性と仏教 いのりとほほえみ

◆会期 四月十五日(火)～五月二十五日(日)

◆会場 奈良国立博物館東・西新館
◆主催 奈良国立博物館・産経新聞社

仏教がわが国に伝来したのは六世紀のこと、最初の出家者は女性(善信尼)でした。善信尼は百濟に渡てさらに仏教を学び、飛鳥時代の仏教興隆に貢献しました。聖徳太子の周辺にも熱心な女性信者の姿がありました。

そのうちも、わが国における仏教発展の原動力になった女性は多く、持統天皇・橘夫人・光明皇后・称徳天皇・檀林皇后といった人々によって、造寺・造仏・写經などが積極的におこなわれることにより、仏教はさかんになり、信仰も深まってきました。

平安時代になると、女性は成仏できないとも言われるようになりますが、それさえも発心の機縁として、法華経などは、鎌倉時代の仏教を考えるうえできわめて重要な出来事



◎阿弥陀如來及両脇侍像(桶夫人念持仏)・厨子 法隆寺

特有とも言
いのりとほほえみ

信仰や淨土信仰の高まりのなかで、女性によって美しい装飾絵が制作され、仏像や仏画の制作の背景にも女性の存在をることができます。またさまざまな靈験記や往生伝の主人公にも女性が少なくありません。

鎌倉時代には、法然や日蓮などの祖師によって新しい仏教が誕生しますが、その周囲にも多くの女性の姿がありました。またこの時代には、明惠・觀尊によって尼寺が創建あるいは復興される動きが見られ、尼自身の活動にも特筆すべきものがあります。明惠の善妙寺創建、觀尊の法華寺復興、信如の中宮寺復興、無外如大の景愛寺創建などは、鎌倉時代の仏教を考えるうえできわめて重要な出来事

える細やかな信仰の遺品も残されています。

この展覧会は、女性の多様な信仰の様相と、わが国の仏教の展開に女性が果たした大きな役割を、I 仏教の受容と女性、II 宮廷の女性と仏教、III 淨土憧憬、IV 信仰と靈験、V 法華経の信仰と女性、VI 母と子のイメージ、VII 鎌倉仏教と女性、VIII 表わされた女性信者の姿、IX 女性の信仰の種々相、という九つのテーマのもとに大観します。仏教が女性をどう見たかではなく、女性が仏教をどう見たかという視点にできるかぎり立ち、多数の国宝・重要文化財を含む名品の数々を通して、女性と仏教の関わりをみつめていきます。

◆主な出陳作品

- 天寿国繡帳(奈良・中宮寺)、●觀音菩薩立像(東院堂安置)(奈良・藥師寺)、●阿弥陀如來及両脇侍像(伝橘夫人念持仏)、●厨子(以上、奈良・法隆寺)、●緊那羅立像(八部衆のうち)(奈良・興福寺)、●法華寺阿弥陀淨土院出土品(奈良・西大寺)、●理趣経(目無経)(東京・大東急記念文庫)、●當麻曼荼羅(奈良・當麻曼荼羅)
- 平家納経(勸持品第十三)(京都・知恩院)、春日権現駿記絵第十七卷(東京・宮内庁三の丸尚蔵館)、●華嚴宗祖師絵伝(義湘絵)、●善妙神立像(以上、京都・高山寺)、●法華経(妙法蓮華經)、●阿彌陀立像(東院堂安置)(奈良・法隆寺)、●普賢十羅刹女像(当館)、●摩耶夫人及び天人像(東京・國立博物館)、●釈迦金棺出現図(京都・國立博物館)、●六道絵(兵庫・極楽寺)、●阿彌陀佛母像(滋賀・園城寺)、●閻魔天像(京都・醍醐寺)、●法然上人絵伝第六・十八・三十四巻(京都・知恩院)、春日権現駿記絵第十七卷(東京・宮内庁三の丸尚蔵館)、●華嚴宗祖師絵伝(義湘絵)、●善妙神立像(以上、京都・高山寺)、●法華経(目無経)(東京・大東急記念文庫)、●當麻曼荼羅(奈良・當麻曼荼羅)



◎普賢十羅刹女像(部分) 当館



◎平家納経(勸持品第十三) 嶽島神社

「扶桑之旅——日本文物精品展」

◆ 会期

五月一日(木)～六月十五日(日)
中国国家博物館(中国・北京市)

文化庁・奈良国立博物館・国際交流基金・中国国家博物館

今年は日中友好条約が締結され三十周年を迎える記念の年です。この間両国は文化、経済、学問など様々な分野で交流を深め、友好関係を築いてきました。文化面では中国の文物を紹介

する展覧会が日本各地で頻繁に開かれるように
なり、時には発掘調査で出土して間もない文物
が日本で初公開されたことも珍しくありません。
それによつて中国文化への理解と関心は一段と深
まり、日本文化の源泉をたどるべく中国へ旅し、
遺跡や博物館をめぐる日本人も増えています。

覧会は少なく、そのため中国人の日本文化への関心は今ひとつ高いとはいえません。中国における最初の日本文物の本格的な展覧会が、ようやく二〇〇一年にいたり文化庁および奈良国立博物館との共催として、上海博物館で開催されたこ



春日鹿曼茶羅 当館

ともその事情を物語っています。しかし、この展覧会『日本文物精華展』は大きな反響を呼び、日本文化への関心が高まりつつある手応えを感じられました。

『扶桑之旅』展は天安門広場に面し、中国を代表する博物館である中国國家博物館で開催されます。中国の首都北京において日本文物を総合的に紹介する展覧会は初めてのことです。展示内容は「日本の考古」、「仏教と神道の美術」、「正倉院宝物の世界」、「貴族と武家の暮らし」、そして「近世の彩り」という構成で、九九点の名品によって日本美術の粹を鑑賞できるようになります。

◎金銅火焰宝珠形舍利容器（奈良・海龍王寺）
亀甲檜垣に藤文様小袖
（京都国立博物館）

◎ 桜螺鈿鞍（文化庁）



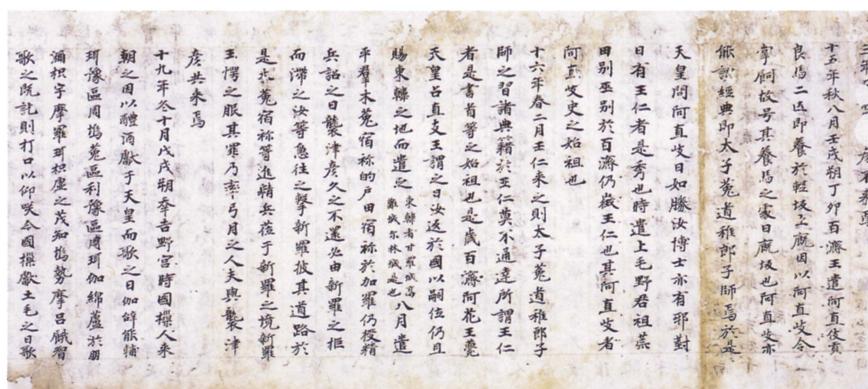
◎色々威胴丸 文化庁



火焰型土器 文化庁



◎多聞王立像 当館



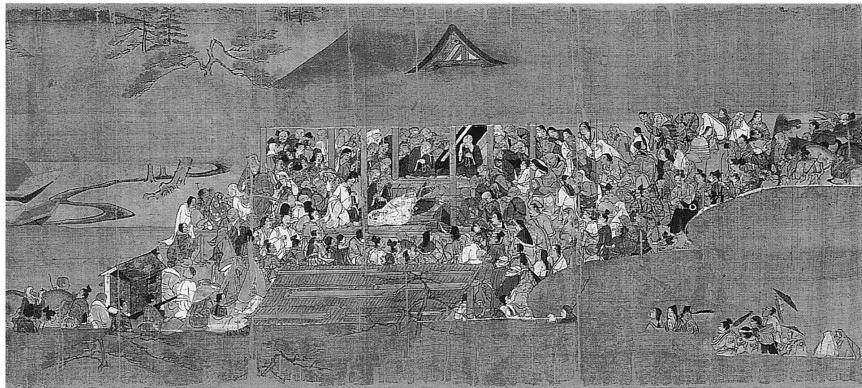
◎日本書紀 卷第十 当館

展示評

親と子のギャラリー『一遍聖絵』展寸評

美術史家 中野 玄二

「外からみる奈良博」



●一遍聖絵 清淨光寺・歡喜光寺

昨年十一月から十二月にかけて、奈良国立博物館で開催された『一遍聖絵』展は、同年十月から十一月にかけて、京都国立博物館で開催された『一遍聖絵』展と連繋した展覧会で、神奈川・清淨光寺・京都・歡喜光寺共有の『一遍聖絵』十二巻と、東京国立博物館所蔵の『一遍聖絵』巻七・一巻を、京都国立博物館では全巻の前半部分、奈良国立博物館では後半部分を展示し、この長大な絵巻の全巻すべてを公開するという壮大な企画であった。これは六年をかけて慎重に行われた修理により、面目を一新したこの国宝絵巻を、広く一般に公開するために実現したのである。

奈良国立博物館の場合は、単に後半部分の展示にとどまらず、同館が毎年継続して開催している『親と子のギャラリー』展の一環として、独自の観点から、京都国立博物館とは異なる展示が企画された。展覧会のために制作された図録も、このため特別の工夫がこらされることになった。

同館では前年の『親と子のギャラリー』展で、「絵巻にしたしむ」というテーマを取りあげていた。展示品には、「信貴山縁起絵」・「華嚴五十五所絵」・「玄奘三蔵絵」・「粉河寺縁起絵」等国宝絵巻を始めとして、多くの名品が並び、人々を驚かせた。今回の『一遍聖絵』展は副題に「絵巻をあじわう」をつけ、前年の「絵巻にしたしむ」をうけて、今回は「一遍聖絵」一点にしぼり、「絵巻にしたしむ」段階から「絵巻をあじわう」という、一段進んだ段階を目指す展覧会担当者の目標設定を明確にしている。

しかし、子供に絵巻をあじわせるのは簡単なことではない。とくに「一遍聖絵」は詞が難解で、絵巻の物語の展開がわかりにくい作品である。このむずかしい絵巻をあじわせるために、この展覧会では、「絵をよくみる」とを中心に据え、七つの重点項目を取りあげて、担当者が平易な文章で、絵巻

表現の奥深さを解き明した。七つの重点項目とは、「裏返しの高野山」・「影をえがく」・「富士山は神のすみか」・「中国の絵をまんだ風景」・「見たことない実景」・「臨終は涅槃のように」・「お墓にまつられた一遍上人像」である。七項目はいずれも精密な観察と熟考の結果、「一遍聖絵」の核心をついた解説になっているが、なかでも注目されるのは、今回の修理により改めて確認された一遍の臨終の姿が、当初は涅槃図の釈迦のように頭北面西で手枕をして横たわる姿だったことに関する解説で、これが現状のように仰向けで合掌する姿に変更された理由について、納得の行く説明が述べられている。

確かにこのような重点的解説によつて、「絵巻にしたしむ」から「絵巻をあじわう」へと、一段と絵巻に対する理解が深まった感がある。しかし、そのような理解が、小中学生にまで可能なのであるうか。私は去年同館のレストランで興味深い光景を見た。私の席近くに坐つた若い母親が、注文の料理が届くまでの相当な長い時間、幼稚園児ぐらいの幼女を膝の上にのせて、「東大寺のすべて」展のあの分厚い図録を広げて、指で差し示しながら説明していた。幼女は黙つておとなしく、母親の指の差すところを見ていた。私にもこの幼女と同じ年ぐらいの孫がいるが、私の孫にこんなことをしたらどうなるのか、そこにある自信がない。しかし、「一遍聖絵」展図録の「はじめに」のなかで、鷺塚館長が述べておられるように、「この解説や、何よりも絵巻そのものを伸立ちにして、おとなと子どもの間に対話が生れる」ことは可能であるようと思われる。そのためには、何回かの親と子の博物館見学の積み重ねが必要であることは論をまたないのである。

特別展

「女性と仏教 いのりとほほえみ」



●金銅経箱 延暦寺



◎地蔵菩薩立像 伝香寺



◎天寿国繪帳(部分) 中宮寺

I 仏教の受容と女性

4／15～5／25 東西新館

- 日本書紀卷第二十(東京・前田育徳会)、
●日本書紀卷第二十二(京都国立博物館)、
●元興寺縁起(京都・醍醐寺)、豊
浦寺出土品(奈良文化財研究所・奈良・
櫻原考古学研究所付属博物館)、
●天
寿国繪帳、中宮寺出土品(以上、奈良・
市二上山博物館)、夏見廃寺出土品(京
都大学総合博物館・三重・名張市教育
委員会・当館)、本薬師寺出土品(奈良
文化財研究所)、
●観音菩薩立像(東院
堂安置)(奈良・薬師寺)、
●阿弥陀如來及両脇侍像(伝橘夫人念持仏)・厨子(奈
良・法隆寺)、
●如意輪陀羅尼經(校倉
聖教のうち)(滋賀・石山寺)、
●粟原寺
三重塔伏鉢(奈良・談山神社)、大野寺
土塔出土品(大阪・堺市埋蔵文化財セン
ター)

II 宮廷の女性と仏教

- 舍利弗立像(十大弟子のうち)、
●緊
那羅立像(八部衆のうち)(以上、奈良・
興福寺)、
●造仏所作物帳断簡(阿闍世王
經卷下・五月一日経)(以上、當館)、自
在王菩薩経下巻(五月十一日経)(奈良・
海龍王寺)、
●成唯識論卷第十(坤宮官
館)、
●理趣経(目無経)(東京・大東急
研究所)、
●陸奥国分尼寺出土品(宮城・
東北大学)、
●下総国分尼寺出土品(千葉・
市川市立市川考古博物館)、
●三河国分
尼寺出土品(愛知・豊川市教育委員会)、
●出雲国分尼寺出土品(島根県教育委員
会)、
●阿波國分尼寺出土品(徳島・石井
町教育委員会)、
●肥後國分尼寺出土品(熊
本市教育委員会)、
●写経所請経文(靜
岡県立美術館)、
●東大寺縁起絵巻下
巻(奈良・東大寺)、
●四天王像(断片)
(奈良・西大寺)、
●百万塔(奈良・法隆
寺)、
●西大寺出土品、
●西隆寺出土品(以上、
奈良文化財研究所)、
●釈迦如來像(塔
本四仏のうち)(奈良・西大寺)、
●十誦
律巻第五十二(称徳天皇御願経)(滋賀・
石山寺)、
●大毗盧遮那成仏神変加持
經巻第一(吉備由利願経)、
●金光明最
勝王経巻第十(百濟豊虫願経)(以上、
奈良・西大寺)、
●阿難四事経(藤原夫
人願経)(京都国立博物館)、
●頻毘婆羅
王諸仏功德経(藤原夫人願経)(京都・
檀王法林寺)、
●中阿含經巻第九(善光
朱印経)(当館)、
●大般若経巻第二百五
十七(池上内親王願経)(個人)、
●日本文
德天皇寒錄(奈良・天理大学)、
●三宝絵
詞(東京国立博物館)、
●法華經巻第一
(荒川経)、
●美福門院令旨(宝簡集の
うち)(以上、和歌山・金剛峯寺)、
●金
光明経巻第三(目無経)(京都国立博物
館)、
●理趣経(目無経)(東京・大東急
研究所)、
●阿字義(大阪・藤田美術館)

III 净土憧憬

一切経(奈良・興福寺)、法華寺出土品
(奈良・法華寺・奈良文化財研究所)、法
華寺阿弥陀淨土院出土品(奈良文化財
研究所)、
●陸奥国分尼寺出土品(宮城・
東北大学)、
●下総国分尼寺出土品(千葉・
市川市立市川考古博物館)、
●三河国分
尼寺出土品(愛知・豊川市教育委員会)、
●出雲国分尼寺出土品(島根県教育委員
会)、
●阿波國分尼寺出土品(徳島・石井
町教育委員会)、
●肥後國分尼寺出土品(熊
本市教育委員会)、
●写経所請経文(靜
岡県立美術館)、
●東大寺縁起絵巻下
巻(奈良・東大寺)、
●四天王像(断片)
(奈良・西大寺)、
●百万塔(奈良・法隆
寺)、
●西大寺出土品、
●西隆寺出土品(以上、
奈良文化財研究所)、
●釈迦如來像(塔
本四仏のうち)(奈良・西大寺)、
●十誦
律巻第五十二(称徳天皇御願経)(滋賀・
石山寺)、
●大毗盧遮那成仏神変加持
經巻第一(吉備由利願経)、
●金光明最
勝王経巻第十(百濟豊虫願経)(以上、
奈良・西大寺)、
●阿難四事経(藤原夫
人願経)(京都国立博物館)、
●頻毘婆羅
王諸仏功德経(藤原夫人願経)(京都・
檀王法林寺)、
●中阿含經巻第九(善光
朱印経)(当館)、
●大般若経巻第二百五
十七(池上内親王願経)(個人)、
●日本文
德天皇寒錄(奈良・天理大学)、
●三宝絵
詞(東京国立博物館)、
●法華經巻第一
(荒川経)、
●美福門院令旨(宝簡集の
うち)(以上、和歌山・金剛峯寺)、
●金
光明経巻第三(目無経)(京都国立博物
館)、
●理趣経(目無経)(東京・大東急
研究所)、
●阿字義(大阪・藤田美術館)

V 法華經の信仰と女性

光明経巻第三(目無経)(京都国立博物
館)、
●理趣経(目無経)(東京・大東急
研究所)、
●阿字義(大阪・藤田美術館)

光明経巻第三(目無経)(京都・石山寺)、
●熊野權現
記念文庫)、
●阿字義(大阪・藤田美術館)

VI 絵巻の第一巻(滋賀・石山寺)、 ●熊野權現 影向図(京都・檀王法林寺)

絵巻第一巻(滋賀・石山寺)、
●熊野權現
影向図(京都・檀王法林寺)

IV 信仰と靈験

- 日本靈異記上巻(奈良・興福寺)、
●日本靈異記中・下巻(京都・来迎院)、
●日本往生極樂記(奈良・天理大学)、
●続本朝往生伝(東京・大東急記念文庫)、
●今昔物語集巻第十二・十七(京都大学
附屬図書館)、
●信貴山縁起絵巻(尼公
館)、
●刺繡釈迦如來說法圖(當館)、
●釈迦金棺出現圖(京都国立博物館)、
●摩耶夫人及び天人像(東京国立博物
館)、
●普賢十羅刹女像(個人)、
●普賢十羅刹女像(京都・廬山寺)、
●利女像(當館)、
●利女像(當館)、
●利女像(静岡・大福寺)、
●十羅刹女像(滋
賀・石山寺)

VII 母と子のイメージ

- 摩耶夫人及び天人像(東京国立博物
館)、
●普賢十羅刹女像(個人)、
●普賢十羅
刹女像(當館)、
●利女像(静岡・大福寺)、
●十羅刹女像(滋
賀・石山寺)

奈良博 NEWS

主催

奈良国立博物館
NHK奈良放送局
NHKさんきメディアプラン

期間

7月1日(火)～8月17日(日)

日本・インド国交樹立50周年記念 インド・マトゥラー彫刻展 日本・パキスタン国交樹立50周年記念 パキスタン・ガンダーラ彫刻展

昨年(平成十四年)、日本とインドの両国、ならびに日本とパキスタンの両国は国交樹立五十周年を迎えた。これを記念して当館では、インド・マトゥラー彫刻展とパキスタン・ガンダーラ彫刻展の二つの展覧会を開催します。両展とも「仏像の誕生」が大きなテーマの一つとなっています。

紀元一世紀、北インドではクシャン朝という王朝が興隆しました。この王朝のもと、インドのマトゥラーとパキスタンのガンダーラで、仏像が初めてつくられるようになりました。両地域における仏像の誕生はほぼ同時と考えられていますが、その姿は対照的な魅力にみちています。赤色砂岩を用いたマトゥラーの仏像は、古代インドの民間信仰に根ざしたヤクシャ像の流れを汲むエネルギーッシュな造形に特徴があります。いっぽう片岩を用いたガンダーラの仏像は、西

方のヘレニズム・ローマ世界の影響を強く受けた華麗な表現がみられ、国際色ゆたかな造形を示しています。

この二つの展覧会では、両地域を代表する仏像をはじめとするすばらしい彫刻作品を、厳選して紹介します。ぜひご期待ください。



仏立像
クシヤーン朝
2世紀
マトゥラー博物館蔵



仏立像
クシヤーン朝
2世紀
マトゥラー博物館蔵

パネリスト 西口順子(相愛大学教授)、牛山佳幸(信州大学教授)、佐野みどり(学習院大学教授)、田中惠厚(宝鏡寺門跡)
コーディネーター 西山 厚(当館資料管理研究室長)

※日時：5月5日(月・祝) 13:00～16:30

会場：講堂 定員：200名 聴講無料

●公開講座●

- | | |
|------------------------------|------------------|
| 4月19日(土) 「光明皇后と法華寺」 | 久我高照(法華寺門跡) |
| 4月26日(土) 「善妙と明惠上人」 | 西山 厚(当館資料管理研究室長) |
| 5月17日(土) 「香川県歴史博物館本の法華経について」 | 梶谷亮治(当館学芸課長) |

※時間：13:30～15:00 会場：講堂 定員：200名 聴講無料

●ギャラリートーク●

- | | |
|-----------------------|------------------|
| 4月23日(水) 「母と子の物語と美術」 | 稻本泰生(当館教育室長) |
| 4月30日(水) 「描かれた女性発願者」 | 谷口耕生(当館研究員) |
| 5月 7日(水) 「鎌倉時代の女性と仏教」 | 西山 厚(当館資料管理研究室長) |
| 5月14日(水) 「奉納された女性の祈り」 | 伊東哲夫(当館研究員) |
- ※時間：14:00～ 会場：展示室 入館者聴講自由
※都合により、当初予定が変更になりました。

●親と子の文化財教室 『平安時代の歴史と美術』[前期] 受講者募集●

- | | |
|----------------------------------|------------------------|
| 第1回 5月10日(土) 現地見学『教王護国寺(東寺)を訪ねて』 | 第2回 6月14日(土) 『平安時代の彫刻』 |
| 第3回 7月12日(土) 『平安時代の大和絵』 | 第4回 8月 9日(土) 『平安時代の仏画』 |

※小学5・6年生、中学生と保護者を対象にした教室です。※はがきまたはFAXで、「親と子の文化財教室参加希望」と明記の上、住所・氏名・学校名・学年・電話番号・同伴する保護者の氏名・参加希望の回(何回でも可)を記入して、当館教育室までお申し込みください。

※参加費は無料ですか、現地見学では実費が必要です。※時間：第1回のみ13:30～15:30、第2～4回は10:00～12:00 ※会場：現地見学以外は当館講堂
※定員：各回200名(先着順)

●夏季講座 『仏教美術の源流と伝播－ガンダーラ・マトゥラーから奈良へ－』 受講者募集●

本年も下記の要領で夏季講座を行ないます。ふるってご参加ください。

日 程：平成15年7月22日(火)～24日(木)

内 容：講座、特別展『インド・マトゥラー彫刻展』・『パキスタン・ガンダーラ彫刻展』見学、現地見学など(詳細未定)。

参加費：3000円

※お申し込みは、申込者1名につき1枚の往復はがきで、「夏季講座参加希望」と明記の上、住所・氏名・学校名・学年・電話番号・返信はがきの宛先を記入して、当館教育室までお申し込みください。締め切りは6月末です。定員は200名ですが、定員を超えた場合は、友の会会員を優先し、あとは抽選となります。

※お問い合わせは当館教育室(0742-22-7008)まで。

●展覧会日程●

	4 月	5 月	6 月
本 館	平常展(彫刻)・〔中国古代青銅器〕		
西 新 館		『女性と仏教 いのりとほほえみ』(4/15～5/25)	
東 新 館		『女性と仏教 いのりとほほえみ』(4/15～5/25)	

展示品の見どころ

華嚴宗祖師繪伝 〈義湘繪〉

国宝 鎌倉時代 高山寺藏

展示期間 5月7日(水)~25日(日)



第三卷

「義湘絵」は、新羅における華嚴宗の始祖といわれる義湘(625～702)の伝記を描いた絵巻である。求法のため唐へ赴いた義湘は善妙という女性と出会う。善妙は道心を発し、「必ずお力になります」と誓った。やがて義湘が帰国すると聞き、善妙は義湘のために様々な道具を用意したが、船がすでに港を出たと知り、海上に身を投げる。あわてふためく周囲の人々。しかし善妙の表情はやすらかで、微笑んでさえいる【写真】。その時、思いがけない事が起きる。黒雲が湧き、稻妻が走ると、巨大な龍が海面に姿を現わした。善妙が龍に姿を変えたのである。追いかけていた龍は、船を背に乗せて新羅へ向かう【表紙写真】。

この絵巻には、善妙の心の動きが見事に描かれている。善妙へのよほどの思い入れなくしてこの絵巻は成立し得なかつた。実は善妙こそがこの絵巻の主人公なのである。「義湘絵」の末尾には長い詞書があり、言葉を尽くして善妙を讃えている。善妙は仏法を敬う深心の人。仏法のためなら何にでも姿を変える観音菩薩のような人。敬によりて愛を成じた愛心ある人…。詞書の最後に注目しよう。「善妙帰法のしるしは図絵に表わすに足れり。心ざしにふうめる(含める)深義は図絵を借るにたよりなし。されば聖教につきてほほその大綱を示す。これまた敬によりて愛を成するあまりなり」。善妙の行為が仏法に帰依したゆえの善行であることを論証するために詞書は記された。すべては善妙のためだった。「これまた敬によりて愛を成するあまりなり」。誰への愛か。

善妙である。善妙への愛ゆえに記された長文の詞書。このような詞書を書けるのは、明惠上人(1173-1232)のほかにはいない。

明恵は善妙の夢を見た。承久2年(1220)5月のことである。石化した善妙が明恵によって生身の女人に戻る夢だった。明恵が創建した高山寺には善妙の愛らしい像が伝わるが、二体の善妙神像が貞応3年(1224)と嘉禄元年(1225)に造立されたことが記録から知られる。高山寺には善妙寺という別院があった。善妙寺は承久の乱(1221)で夫に死別した女性たちが住む尼寺で、貞応2年(1223)に創建された。

「義湘絵」はいつ誰が何のために制作したのか。「義湘絵」は善妙を讃える絵巻である。物語の筋は『宋高僧伝』所収の義湘伝から採ったが、主人公を善妙に変え、絵だけではわからない深義を伝えるため、長い詞書が付けられた。承久の乱以前に明恵が見た善妙の夢は生々しく、「義湘絵」とは異なる印象を受ける。夢の中の善妙はいまだ神ではない。数年後には高山寺と善妙寺の鎮守神として善妙像が造立される。善妙はいつ神になったのか。夢と神像化をつなぐあたりに「義湘絵」を位置付けたい。善妙の行動を正しく解釈し、石化した善妙を救い出すごとく、善妙が神として祀られるに値する存在であることを知らしめるため、善妙への愛を込め、明恵によって「義湘絵」は制作されたと私は考えている。そしてこの絵巻のよき読者に善妙寺の尼衆がいたことは言うまでもない。

(資料管理研究室長 西山 厚)

■開館時間 9時30分～17時、(毎週金曜日は19時まで)

※いずれも入館は閉館の30分前まで

■休館日 月曜日

(ただし4月28日、5月5日は開館、5月6日(火)休館)

■ 観覧料金

平常展		大人	大学・高校生	
	一般	420円	130円	
	団体	210円	70円	
特別展		大人	大学・高校生	中学・小学生
	一般	830円	450円	250円
	団体	560円	250円	130円

*団体は責任者が引率する20名以上。

*団体は責任者から10名以上。

*「女性と仏教　いのりとほほえみ」開催中でも、本館のみ観覧のかたは、平常展料金で入館できます。

*5月5日(月・祝)は小・中学生無料



[交通案内] 近鉄奈良駅から徒歩15分、またはJR奈良駅・近鉄奈良駅からバスで「冰室神社・国立博物館」下車すぐ

『奈良国立博物館だより』は、1・4・7・10月に発行します。郵送をご希望の方は、何月号かを明記し、返信用封筒（90円切手貼付、宛名明記）を同封して、当館の企画室にお申し込みください。

